

殷代の宗教と社会

——「饗飮文の彼方」補正——

伊 藤 道 治

本日の発表の題目として、「殷代の宗教と社会」という大変大きな標題をかかげましたが、ここで私がお話ししようと考えておりますことは、宗教と社会との接点を示すと考えられる、ある一つのごく限られた問題についてであります。しかも大変空想的な話でありまして、お聞き苦しいことになるかと思いますが、暫く時間をいただきます。

はじめに問題の提起を兼ねて、ある文章を読みます。

「われわれは、分析の過程で、表現的芸術と非表現的芸術の二元論が、別の二元論に、すなわち彫刻と描画、顔と装飾、個人と役割、個別的存在と社会的機能、共同体とヒエラルヒーというような二元論に変形するのを見てきた。これらすべては、結局二元論を確証している。そしてこの二元論は、塑像的表現と画像的表現とのあいだで相関関係であるとともに、分割表現の原理のさまざまな表出形態の真の『公分母』をわれわれに与えているのである」と。

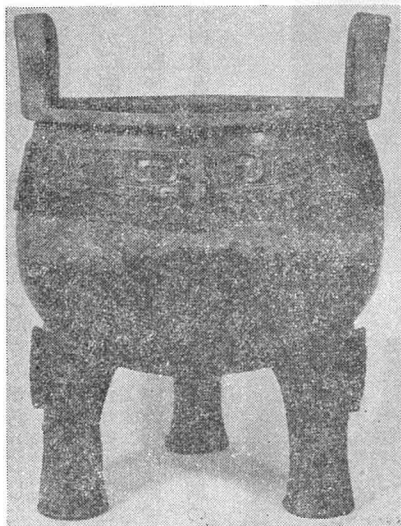
いま私が読みあげました文章は、レヴィ・ストロースの「アジアとアメリカの芸術における図象表現の分割性」と題する論文の一節であります。^①ここにてまいりました分割表現とは何かと申しますと、殷周時代の青銅器に特徴的な饗飮文の表現技法がその一つであります。これはどういうことかと申しますと、立体的な動物を尾の方から鼻先にむけて左右に分割し、それを鼻筋を中心として左右に展開し、平面に表現したことを意味しているのであり、その動物は鼻筋の部分によって一つにまとめられながら、顔や胴体は左右にその側面を描かれることになります。図1方鼎の写真のように、本来



(2) 尖足鼎（殷後期）



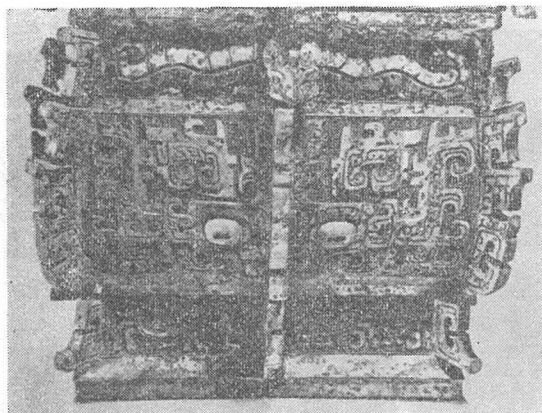
(1) 方鼎（西周前期）



(4) 円鼎（殷後期）



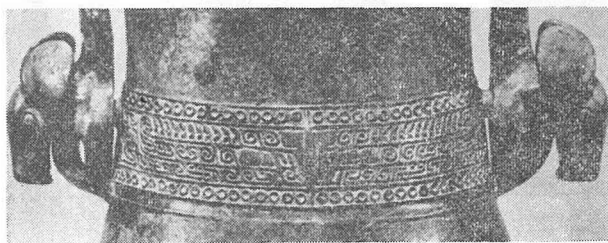
(3) 鬲足盃（殷中期）



(5) 令方彝（西周前期）



(6) 簋（殷後期）

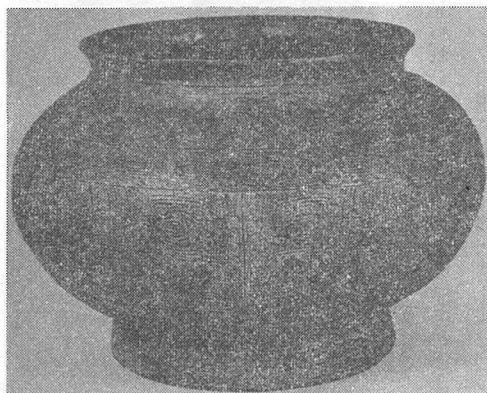


(7) 父辛卣（西周前期）

立体であるべき顔の両側面を、鼻筋を中心にして左右に平面的に展開して顔の正面図を構成したものであり、したがって、これは一見平面ではあるが立体を意識し、内面にそれを含んでいると言えます。これは顔のみであります。この図1と2になりますと、非常に装飾化抽象化されてはおりますが、明らかに胸部をもふくめて表現されております。この図1と2の二つは、前者が西周時代の前期のものであるのに対し、後者は殷後期の前半すなわち安陽の古い段階に属するものであります。例えば殷代中期のものであるこの盃(図3)や、鄭州白家莊或いは輝県琉璃閣で発見された殷中期の青銅器



(8) 甗（殷後期）



(9) 甗（殷後期）



(10) 扁脚鼎（殷後期）

の饗養文は、明らかに胴部をもふくんだものであります。そして殷後期後半の鼎（図4）や西周前期の令方彝（図5）或いは殷後期の簋（図6）の饗養文は、殷中期3の盃や2の鼎から西周前期の方鼎1へ向う過渡的な性格を示していると言うことができましょう。図4・5では、胴部は極めて縮小化され、顔の一部かのようにつけられるに過ぎず、製作者の意識は明らかに顔へより強く向けられているのであります。このことがどのような意味をもつのかという点は、のちにもう一度ふれることに致します。

では、さきに読みあげましたレヴィー・ストロースの言葉のなかにでてまいりました塑像的表現と画像的表現とは何を意

味しているかと申しますと、それは饕餮文に見られる二つの類型を意味するのであります。彼はその論文のなかで、スウェーデンの有名な中国学者であるB・カールグレンの説にふれ、B・カールグレンがA様式とするもの、例えばさきにごげた1の方鼎の饕餮文などは塑像的表現であり、B・カールグレンがB様式とする卣(図7)・甗(図8と図9)などの饕餮文を画像的表現とするのであります。^②8・9などは、非常に装飾化されているために、一見饕餮文ではないかのような印象を与えるのでありますが、7や図10の鼎・図11の爵と比較すれば、これが極端に装飾化された饕餮文であることがわかります。そして、これらは、レヴィ・ストロースの言葉で言えば、画像的であります。また換言すれば平面的であるとも言えます。平面のうえに細い輪郭線を彫り込んで、緻密な文様を描いたと言うことができます。また図12の尊―殷中期―や図13の罍―殷後期前半―の饕餮文は、輪郭線を書き加えたものと言いますが、やはり平面的であり、画像的です。



(11) 單柱爵 (殷後期)



(12) 尊 (殷中期)



(14) 盍（西周前期）



(13) 平底罍（殷後期）



(15) 尊（殷後期）

これに対してA様式とよばれるものは、青銅器の表面から饕餮文の肉体をもりあげたといいますが、肉体を貼り付けたといった方法によって表現されているのであり、彫り出すという方法でもあると言えるのであり、より塑像的或は立体的へと近づいたものであると言うことができます。図14の盍はその点を明らかに示しているものでありますし、さきにあげた1や4・5の饕餮文もそう言えるかと思えます。そして図15の尊などは、描画と塑像との二つの性格を併せもったものと言うことができます。実際には、多くの

青銅器の饗養は、この二つの様式の各種の中間段階を示すものであり、これはA、あればBといったように簡単に類別できるわけではありませんが、類型化して行けば、こうした二つの様式が抽出されるのであります。

以上のところをまとめて見ますと、共同体とヒエラルヒーといった対立するかに見える二元性は、一方ではB様式とA様式といった二つの類型の饗養文に対応することになるのであります。二つの類型の饗養文は、饗養文を表現するための分割技法という一つの技法によって統一されており、したがって水平的な共同体と垂直的なヒエラルヒーという二つの対立する方向のものが、殷代の社会では統一されて一つに機能していたと言うことになり、ここにレヴィ・ストロースの言う「構造」という命題があるのであります。それは別として、私流に言うならば、当時のヒエラルヒーは、共同体を基礎とし、それを積み重ねることによって形成され、また機能していたということになりますし、「アジア的生産様式」という問題もからんで来るのであります。ここでは問題を饗養文に限定して、先に進むことにいたします。

以上のようなレヴィ・ストロースの説は、一九四四年に発表されたものであり、彼の説はアメリカ西北海岸の民族調査をもとにしているのであります。中国に関しては、さきにあげたB・カールグレンの研究のほかには、一九三〇年代に発表されたH・G・クリールやW・P・イエーツの説を利用して、^③推測を行ない、将来研究が進めば、自説が証明されると確信するという段階であったのであります。これは、甲骨文による殷代の研究がほとんど進んでいなかった段階にあったのであります。

そこで、これから甲骨文の研究にもとづいて、どんなことが考えられるかを見ようと思います。例えば、甲骨文資料の大半を占める祭祀関係の資料によって考えて見ますと、内祭とよばれるものと、外祭とよばれるものの二つに大別されます。内祭と言いますのは、殷王朝の祖先祭祀であり、外祭と言いますのは、山川の神や殷に征服された国族の守護神に対する祭祀であります。これらは本来、殷の神ではなく、殷の勢力が拡大するにつれ、その支配下に入った族の神を祭ることによって、殷と他族との間の精神的な紐帯としたものであり、いわば政治的な意味の強い祭祀であると考えられます。

この外祭の神は、風雨や稔りなどを左右するものと考えられていたのですが、股王をはじめ、股の人びとに直接的に働きかける力は、原則的には認められていなかったものであります。

これに対して内祭というのは、股の先王を中心とする祖先祭祀であり、これは股の人びとの肉体にも直接働きかける力をもつものと考えられていたのであります。そしてこの神は、股の共同体を結びつける中心にあったのであります。甲骨文の初期には、この内祭と外祭とを統一するようなものとして帝—天の神といわれる—があらわれています。

ところが、内祭といわれる祖先祭祀にも、二つの型があるのであります。それは何かと申しますと、より血縁を重視するものと、もう一つは傍系をも含めて王位継承者を祭るものであります。前者は父子相続を行なった直系王を祭祀の中心におくものであり、後者は兄弟相続をした傍系祖先をもふくめた王位に即いたものを祭るものであります。前者は共同体の中心を志向するものであるのに対し、後者はむしろ外に向い、政治権力の中心を求めたものと言えます。

したがって、外祭と内祭、或いはより血縁を重視する祖先祭祀と、政治に一層の関心をしめす祖先祭祀といった共存関係、すなわち共同体と政治権力のヒエラルヒーとの共存関係が、饗饗文という分割技法によって示される意識形態と対応していたということができます。

しかしながら、三百年ほどに及ぶ間の甲骨文の変化を見ますと、さきの外祭と内祭との共存関係はのちに崩れ、外祭は内祭に集合化されはじめます。すなわち、本来異族神であったものが、股の祖先神の系列に加えられるのであります。このことは一見股の人びとの間の血縁意識の強化ととれるのでありますが、しかし本質的には血を同じくするものという共同体意識の弛緩であり崩壊であります。この点は祖先祭祀の変化にも見られるのでありまして、傍系をもふくんだ王位継承者すべてを祭ることになるのであり、祖先祭祀というよりは、むしろ先王祭祀というべきものになります。このことは、明らかに共同体内部、或いは共同体間の等質性が失なわれて、王を中心とする政治的なヒエラルヒーが次第に確固としたものになってきたことを示しているのであります。

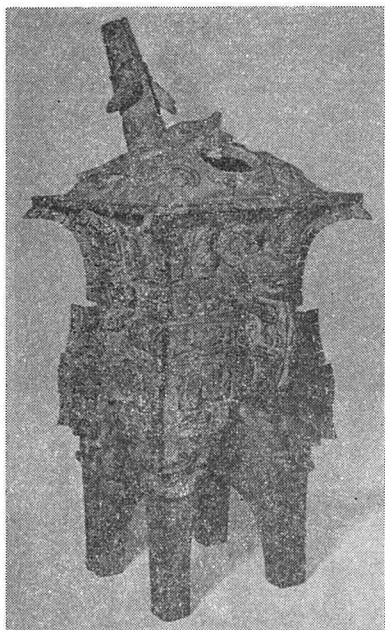
このような変化と同時に、殷の祖先神の働きにも、変化があらわれてまいります。すなわち、本来的には祖先神は、善いずれにも働き、しかもその善と悪との転換が、生人には予測できない存在と考えられていたのであり、どの祖先がタタリをしているかを、殷の人びとは卜占によって確かめねばならなかったものであり、それだけに無気味な存在であったのでありますが、のちには生人をたすける善き神といった面が強く意識されるようになるのであります。

このような変化は、現実の世界における王権が確固としたものになるのにつれて、宗教の世界にあらわれた変化であると思われる。すなわち王を頂点とする政治的なヒエラルヒーが社会に定着するにつれて、王朝における血統を重視する祖先祭祀が、むしろ政治的なものである王位を重視する祭祀に変化したのであり、死んだ先王は善き王であったと同じように死後はよき神として崇拜されるようになったのであり、これはまた現在の王をも同じようによき王であることを人びとに保証することになったのであります。そしてこれとは逆に共同体の血縁による結合意識は弛緩していったと考えられるのであります。

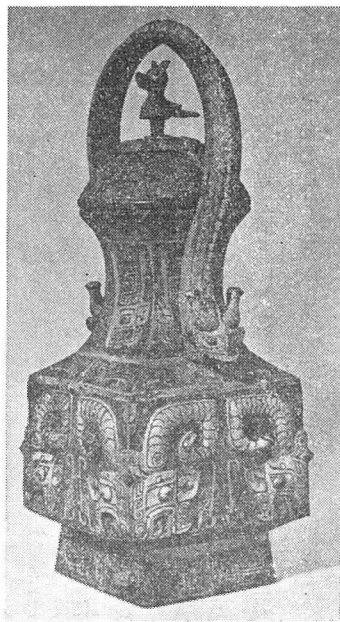
さて、甲骨文によって考えて来た当時の祭祀の動きと、はじめにふれましたレヴィ・ストロースが饗飨文によって言わんとしたことは、一体どのような関係になるのでありましょうか。

ここで問題になることは、饗飨文の時期的な変化ではないかと考えられます。さきにふれたように、レヴィ・ストロースは、饗飨文にAとBの二様式を認めたのでありますが、この二つの様式には時代の上で差異があるのであります。すなわち、B様式が古い要素を伝えているのに対し、A様式が新しいのであります。勿論この二様式は殷代後期には併存していたのであり、その故にこそ、レヴィ・ストロースは、この二つの共存を考察の手掛りとしていたのであります。中期の饗飨文である3と比較して見れば、B様式の2や7・10などは、明らかに中期の発展と複雑化であると言えます。そしてこれらはいずれも動物の胴部をもふくめて、分割技法によって表現されているのであります。

したがって、動物を分割技法によって文様として表現することが、例えば共同体と政治的ヒエラルヒーの対立的統一の



(17) 方盃（殷後期）



(18) 方卣（殷後期）



(19) 罍（西周前期）

意識と相関関係があるとすれば、それは中期或いはB様式の饕餮文こそそれにふさわしいと考えられるのであります。

ですから、胴部を縮少して顔面に重点がおかれるようになって来たこと、また次第に塑像的表現に移って来たことは、おそらく王を中心とするヒエラルヒーが優位を占めはじめたことを示していると考えるべきでありましょう。そして塑像的表現は、殷代後期の後半には、基本的には器の表面を装飾する従来の方針をとりながら、その器形を利用



(19) 尊（殷後期）

して、より立体的な表現をとるようになります。図16の方缶、図17の方盃や図18の甗の足のつけ根の部分の饕餮文はその例ですが、図19の尊の文様は塑像的頭部と分割技法による胴体とをたくみに組み合わせたものであります。しかしこの19になりますと、大変リアルで美事な虎になっているのであります。饕餮文のもつ奇怪さはむしろ失なわれつつあるのであります。そして図20の卣は、この19の文様の主題を完全に立体化し塑像化して器形としたものであると言えます。この二つはいずれも人間の形をした悪霊を、虎形をした饕餮が呑み込もうとしているところを表現しているのであります。

しかもこのような変化と平行するようにして、饕餮文の顔に表情があらわれて来ます。その方法は主として、18のように眼にヒトミを加えることによって行なわれるのであります。このことは、中期やB様式の饕餮文にはほとんど行なわれなかったことであります。後期にも行なわれないものが可成りあるのであります。西周時代にはむしろほとんどのものにヒトミを入れるのであります。この問題はかつて論じたことがありますので、簡単に結論のみを申しあげますと、この表情の出現ということは、さきほど述べました、祖先神の働きのうちの悪魔的要素が消えて、善き神としての働きのみが意識されるようになって来たことと平行する現象であったのであり、そのことは本来饕餮文が無表情ということによってその神性を表現していたのに対し、むしろその本来の宗教的な意味が次第に希薄になって来たことを意味しているのであります。唯一の資料であります。図21の人面方鼎では、饕餮文のおかれる可きところを、人面におきかえているのであります。これは饕餮文のもつ神性の意義が意識されなくなったことを示して

いるのであります。この人面そのものにはある種の無気味さがあり、そこから当時の神性をさぐる手掛りを与えるのであります。神性を示すためには、本来それは人間であってはならず、人間以外のものでなければならず、それが中国では饕餮であつたのであります。同様にさきにあげた19の虎や、侯家荘の大墓から出土した牛鼎・鹿鼎の牛や鹿なども、本来の青銅器の文様に与えられた神性が失なわれたものと言えるのであり、それはイニシエーションや祭祀のときに使用される仮面のもつ意義と比較すれば明らかであります。すなわち、仮面が奇怪なものであるからこそ、それを着けた人物ははじめて神性を得るのであり、別の人格に再生することができるのであります。そして、この奇怪さが失われること、神性の失われること、こういったことも、実は立体化、そして王を中心とするヒエラルヒーの強化、共同体意識の弛緩と平行していたと言えるのであります。

最近の報告によりますと、河南省偃師県二里头遺蹟からは、大きな宮殿址と思われるものが発見され、そのことは、殷



(㉙) 乳虎卣（殷後期）



(㉚) 人面方鼎（殷後期）

前期文化の時代にかなり大きな政治権力が存在していたことを物語るものであります。また殷中期の時代には、青銅器をその權威のシンボルとする族長たちが各地に出現していたことも、考古学的に確かめられているのであります。この段階ではまだ政治的なヒエラルヒーと共同体との二者のバランスは保たれていたと考えられます。饕餮文は政治的ヒエラルヒーと共同体との二元性の統一を示すものであるとする、レヴィー・ストロースの考え方を認めるならば、こういったことが考えられるのであります。しかし後期になると、このバランスが崩れて来たのであり、そのことが、以上にのべて来た饕餮文の変化、祭祀の変化の背後にうかがえるのでありますし、また殷代末期になって、族長たちがはじめて自己の功績を、その權威の象徴である青銅器に記録することになること、即ち個人が意識されはじめたことも対応したものであったのであります。

さて、レヴィー・ストロースは、A・Bの二様式を同一時限のうちにとらえて、二元性の統一を殷代後期に見ようとしたのであります。彼の研究が発表された当時と比較して、現在では殷に関する研究は、格段の発展を見たのであり、その結果によれば、彼の考え方はむしろ、殷前期或いは中期にこそふさわしいものと言えるのではないかと考えられます。そして常に時の流れというものを重視するわれわれにとっては、饕餮文のB様式からA様式への変化、いいかえれば、描画から彫像、平面から立体へという変化が、共同体的な祖先祭祀から政治的な先王祭祀へという変化、共同体的平等から族長権の確立へという変化と対応し、さらにそれはヒエラルヒーと共同体との統一からヒエラルヒーの優位へという変化と対応するものであったというこのほうがより重要であると考えられるのであります。そこに歴史学と構造主義との問題があるのでありますし、これはまた通時と共時とをどう結合させるかという構造主義自体の問題でもあると思うのであります。それはそれとして、私にとりましては、この二つの変化の対応と同じ関係が他の古代文明のうちにも見られるものであるのかどうかということが重要になってくるのであります。

以上、大変大雑把に、饕餮文の変遷とその背後に見られる殷代の社会の動きとの関係を見て来たのであります。この

ような動きは、西周時代の前期にもひきつがれて行きます。というよりは、社会的な動きから見れば、殷の後期と西周の前期とは一つの大きな時代としてくられる可きものと考えられます。ところが、西周の中期に入って参りますと、文様に全く新しい要素があらわれて参ります。それは波状文とよばれるものであり、さらに鱗文などが加わって来ます。それらは、饗餼文とはちがって、線或いは帯で構成される幾何学的な文様であるかと思えます。それまでの饗餼文とは全く性格のことになったものと言わなければなりません。したがって、饗餼文の変化と社会の変化についてお話をして参りました私としては、当然もつと大きな変化でありますところの、饗餼文から幾何学文への変化は、どのような意識の変化、さらには社会の変化と対応するものであったのかという点についてもふれなければならなくなるのでありますが、正直なところ、現在の私には、この問いに対する答はないと申しあげなければならぬのであります。

勿論、波状文がどのようなことを表現しようとしているのかといったことになると、個別的には考えられないことはあります。例えていいますならば、「山」と「谷」とが交互に無限にくりかえされてゆく波状文の裏面にある意識は、「昭穆制」といわれる宗廟の制度を通して表現された祖先祭祀を意味し、無限運動は血統の永続を祈求する意識を表現しているとも言えましょう。かつてふれたことでもありますが、西周中期から、金文には、「子々孫々永く宝として用いんことを」という慣用的な言葉の使用が一般化して参りますことと平行する現象であると言えます。^⑤そして殷以来の古い共同体が分解し、それにかわって、この時期に新しい「宗法制」家族が成立してきたことを暗示しているとも考えることもできるかと思われれます。

また青銅器を帯状にとりまく鱗文は、一つ一つの鱗文は代々の族長、それは「宗法制」家族のなかの際立った存在であります。それが帯状に連なって器をとりまくということは、血統という点で考えれば、永遠につづくなかの一つの環にしかすぎないという意識を示しているというように説明することも可能であると考えられます。

しかし、もうお気付きのことと思いますが、個々の文様の説明だけでは、解答ができたとはいえないのであります。こ

のような意識を表現するために、饗餼文にかわって、どうしてこういった鱗文や波状文が選ばれ、他のたとえば螺旋文や渦卷文、或はもつとことなった表現方法が選ばれなかったのか、という問題まで説明すべきだと言われると思います。また古い共同体と「宗法制」家族とは、具体的にどうちがいが、「宗法制」家族を成立させた「力」^{ちから}は何かということも説明いたさねばならないのであります。さらに振り出しにもどって、殷のときにはなぜ饗餼文という表現形式をとり、他のものではなかったのかということも問題にすべきだと言われるかもしれません。しかし、古い共同体と「宗法制」家族という問題は、私のこれまでの研究にとりましても重要なテーマの一つであったのであります。殷から西周前期までと、それ以降の族構成とでは、異質らしいという程度にしかわからないのであります。ですから「宗法制」とカッコをつけてあるのでありますし、またそれ以外の問題になりますと、もうこれは歴史学の領分ではなくなるといえます。下手をすれば観念の遊戯におちいってしまいます。したがって、今日のところは、殷代には饗餼文という表現形式があり、それが次第に変化した背後には、社会的にも、政治的にも、宗教的にも、大きな変化があったのだということを確認して、このお話を終りたいと思います。

附記 本論は一九七四年十一月二日の史学研究會總會において行なった講演の記録に一・二加筆したものである。その概要はかつて「饗餼文の彼方」(拙著『中国古代王朝の形成』所収)という標題の論説の第三節として発表した。が、この講演の機会に補正を加えた。両者を併せてお読みいただければ幸いである。

① クロード・レヴィ・ストロース著 荒川幾男ほか訳『構造人類学』(一九七二年五月みすず書房)所収。なお原論文は一九四五年に発表されたものである。

② Bernhard Karlgren, New studies on Chinese bronzes, The Museum of Far Eastern Antiquities, Bulletin 9, Stockholm, 1937.

③ 原著注参照。

④ 殷・周の青銅器と神々(『日本美術工藝』第四〇八号)、のち「饗餼文の彼方」第一節第二節として訂正のうえ拙著『中国古代王朝の形成』(昭和五〇年三月創文社)に再録。

⑤ 「新出金文資料の『意義』」(平凡社『書道全集』第二六巻、のち『中国古代王朝の形成』再録)。

(神戸大学文学部教授)